神奈川県漢詩連盟九詩期会江南漢詩ツアー実施報告

2017/11/09

初めての試みでしたが、日中協会のご後援と、企画及び現地との交渉にあたっていただいた(株)メディア新日中のご尽力により、交流会・講演会・旅行それぞれ成功裡に終了することができました。また神奈川県漢詩連盟からは先方へのお土産を提供いただくなど、関係の方々に多大なご協力をいただきました。深く感謝いたします。

１　趣旨

中国江南地方の風景文物に触れ、現地の漢詩愛好者や研究者と交流することで、漢詩に対する理解を深めるとともに、日中の文化交流に寄与する。

２　後援

一般社団法人　日中協会

３　経費

参加者一人　**１３万円**（2 人 1 室。1人 1 室希望者は2万円を加算）

４　参加者

住田先生、古田先生、好文会:埴原、八起会:長岡夫妻、十期会:中野、九詩期会:牛山、宇野、武田、平賀、松本夫妻、山口　計 13 人

５　日程　2017 年 10 月 25 日～30 日、５泊６日（当初予定は～29 日、４泊５日）

第1日 10/25(水)	8:45　羽田発 MU576 便→　上海浦東空港　10:40 着 上海豫園で小籠包、魯迅記念館、田子坊	上海泊 錦江国際飯店
第2日 10/26(木)	・専用バス(39 人乗り)で杭州へ 霊隠寺、浙江省博物館、西冷印社、河坊街((両先生交番で休憩)	杭州泊 浙江梅地亞(メディア)賓館
第3日 10/27(金)	・バスで蘇州へ **○滄浪詩社蘇州市詩詞協会と交流会、昼食** **○蘇州大学呉雨平教授講演会** 李公堤「得月楼」にて上海蟹(篆刻家**汪鳴峰**氏同席)	蘇州泊 パンパシフィック蘇州
第4日 10/28(土)	・バスで烏鎮へ　(住田先生は所用によりこの日帰国) 烏鎮雅園(老人施設)見学、烏鎮(水郷) **寒山寺詩碑前で吟詠**、　昆劇ほかの民俗芸能鑑賞	同上
第5日 10/29(日)	蘇州博物館、蘇州刺繍研究所　→バスで上海へ 上海浦東空港 17:45 発**予定便が台風 22 号で欠航**	上海浦東泊 藍舎快捷酒店※
第 6 日 10/30(月)	7:30　MU575A 便、1 時間遅れにて羽田帰着 (松本さん出国時リチウム電池をチェックされる)	※旅行保険適用請求中

６　交流会

蘇州滄浪亭にて**滄浪詩社蘇州詩詞協会**と交流会　　**通訳：MJC 焦社長**　　(敬称略)

挨拶・紹介	滄浪詩社　周秦社長(昆劇の研究家、蘇州大学教授)	住田:全漢連、神漢連紹介 山口:九詩期会紹介、日本人と漢詩
朗詠・書などの披露	1　魏嘉瓚　(元詩社社長、著名な朗詠大家) 2　朱九如　(蘇州中学校先生)	中野:蘇東坡「前赤壁の賦」感想、 中国側に朗読依頼→朗読

	3　呂守経　（滄浪詩社会員） 4　馬小萍　（滄浪詩社副社長　女） 5　周　秦　（前掲） 書：書道家（書道披露）王淵清 画：画家　（水墨江）　顧逸 補佐：丁鳳萍（詩社秘書長、副社長、女）	住田：詩吟 書：牛山

・朗詠は音楽的、みなさん美声で素晴らしい（ごく一部録音）。楽しくなごやかな雰囲気のうちに終了。

・滄浪亭近くの蘇州料理店にて合同で昼食。

・滄浪詩社の皆さんも、来てくれて楽しかったとおっしゃっていたそうです。有意義でした。

7　講演会　　（蘇州大学伝統文化課堂内の教室にて。通訳：MJC 焦社長）

蘇州大学文学院　呉雨平教授　「同化と異化―日本漢詩と中国古典詩歌伝統」

（概要）日本人は中国の漢詩を受け入れて、一方では同化したが、他方では日本的なものを取り入れて異化した。日本は外来文化を表面的には拒まない。しかし選択的に受け入れる。バランスが良い。

「摂取醇化」―作者も読者も日本人だから日本人に見合うものになっていく。中国では「志（陳述心志）」を表すが、日本では「心」を表す。内面的な「あわれ、わび、さび」が日本の漢詩にあらわれる。

「和習」＝「和臭」にはミスの和臭とわざと作った和臭がある。菅原道真は「晩秋二十首山寺」であえて韻を踏まなかった。和魂漢才的主張である。石川丈山の「富士山」は和臭の代表。日本人の心を書いた詩で中国人の感性にはない。中国のまねの和臭から、和漢を配合して発展させた内容になり、中国の漢詩とは違う漢詩になっている。

（教授は高度に完成した「和臭」に好意的。「万葉集」や「懐風藻」の研究あり。文武天皇や空海にも言及。教授の著書「橘与枳」←南橘北枳。これも有意義でした。録音できなかったのは不覚。）

（住田先生は講演後、教室で新作の詩を発表され、好評でした。）

8　反省

・交流の形式はでき、成功だったが、質疑応答や対話の時間が少なく内容は今ひとつであった。ただし時間があっても中国語ができる人が少ないと交流は深まらない。複数の通訳の準備などが必要。

・交流会・講演会とも初めての試みでぶっつけ本番であったため、記録担当などの役割分担ができておらず、きちんとした記録を残すことができなかった。ビデオ撮影など事前に準備しておくべきであった。

・住田・古田両先生に参加いただいたことで、当方の格を保つことができてよかった。

・観光については、中国の交通事情から観光地でのバスの乗降ができず、どこも遠くの駐車場から歩くことを余儀なくされた。山口の万歩計五日間の平均 15,246 歩。両先生にご苦労をかけてしまった。

・烏鎮雅園の老人大学はカルチャー教室のようなものだった。交流対象としては「詩社」が望ましい。

・このツアーの原動力であった梅村さんが、家庭の事情で参加されなかったのは真に残念だった。

9　今後について

・滄浪詩社は、また機会があればとおっしゃっていた。神漢連から、あるいは他サークルから交流の希望があれば繋げられる。中国の他の都市の詩社なども検討は可能。

・次回を検討の場合は、今回の交流会をモデルとして、よりよいものを考慮されたい。

・もし滄浪詩社の方が訪日されることがあったら、歓待したいので皆さんのご協力をお願いします。

（九詩期会世話人　山口　幸雄）